

ホクコーフェスティバル®C水和剤

■種類名：ジメトモルフ・銅水和剤

■有効成分：ジメトモルフ 15.0%
塩基性塩化銅 58.8%
[銅として] 35.0%

■殺菌剤分類：40, M1

■登録番号：第24966号

■毒性：普通物(毒劇物に該当しないものを指している通称)

■登録初年：2025.05.14

■性状：淡緑色水和性粉末

■有効年限：5年

■包装：500g×20袋

【特長】

- ベと病、疫病に高い効果を示すジメトモルフに銅を配剤した混合剤。
- ベと病、疫病だけではなく、細菌性病害にも効果がある。
- 既存薬剤耐性菌にも有効である。

【適用内容】(2025年10月末日現在)

作物名	適用病害名	希釈倍数 (倍)	使用液量 (ℓ/10a)	使用時期	本剤の 使用 回数	使用 方法	ジメトモルフを 含む農薬の 総使用回数	銅を含む 農薬の総 使用回数	
大粒種ぶどう	べと病	600	200～700	収穫 30 日前 まで	2 回以内		2 回以内		
小粒種ぶどう				収穫 45 日前 まで					
ばれいしょ	疫病 軟腐病	400～600	100～300	収穫 14 日前 まで	3 回以内	散布	3 回以内	-	
きゅうり	べと病	600～800		収穫前日まで					
はくさい、ねぎ		1000		収穫 14 日前 まで					
キャベツ	べと病 黒腐病			収穫前日まで					
メロン	べと病								
トマト ミニトマト	疫病	600～800		収穫 7 日前 まで					
たまねぎ 葉たまねぎ	白色疫病 べと病								
あずき	茎疫病 褐斑細菌病 茎腐細菌病	600		収穫前日まで					
だいず	べと病 茎疫病								
えだまめ	斑点細菌病 葉焼病								
かぼちゃ	べと病 疫病	1000		100～400					収穫 3 日前 まで
すいか	褐色腐敗病			100～300					収穫 7 日前 まで
なす			収穫 3 日前 まで						
レタス	べと病								



【効果・薬害等の注意】

- 使用量に合わせ薬液を調製し、使いきること。
- 散布液調製後はそのまま放置せず、できるだけ速やかに散布すること。
- 本剤は茎葉部からの吸収移行性及びガス化による効果はないので、散布むらのないよう均一に散布すること。
- 本剤は予防効果が主体で治療効果は弱いので散布時期を失することなく処理すること。
- 本剤は無機の銅を含む剤であるため、きゅうり、はくさい、メロン、キャベツ、レタスに対して薬害を生じるおそれがあるので、下記の事項に十分注意すること。
 - ◆ 幼苗期は特に発生しやすいので、中期以降の散布にすること。
 - ◆ 高温期の散布は症状が激しくなることがあるのでさけること。
 - ◆ 連続散布すると葉の周辺が黄化したり硬化したりすることがあるので過度の連用をさけること。
 - ◆ 炭酸カルシウム剤の所定量の添加は、薬害軽減に有効であるが、収穫間際には収穫物に汚れを生じるので留意すること。
- はくさいに使用する場合、結球期以降の散布は薬害が生じる場合があるのでさけること。
- ぶどうに使用する場合、薬害を生じることがあるので炭酸カルシウム剤を加用すること。
- 連続使用は耐性菌出現のおそれがあるので、なるべく連用をさけ、作用性の異なる他の剤と組合せて輪番で使用する。
- 空袋はほ場等に放置せず、環境に影響のないよう適切に処理すること。
- 本剤の使用に当っては使用量、使用時期、使用方法などを誤らないように注意し、特に初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

【安全使用上の注意】

- ❖ 誤飲、誤食などのないよう注意すること。誤って飲み込んだ場合には吐き出させ、直ちに医師の手当を受けさせること。
本剤使用中に身体に異常を感じた場合には直ちに医師の手当を受けること。
- ❖ 本剤は眼に対して強い刺激性があるので眼に入らないよう注意すること。眼に入った場合には直ちに十分に水洗し、眼科医の手当を受けること。
- ❖ 散布液調製時および散布の際は保護眼鏡、農業用マスク、手袋、長ズボン・長袖の作業衣などを着用すること。作業後は手足、顔などを石けんでよく洗い、洗眼・うがいをする。
- ❖ 水産動植物(魚類)に強い影響を及ぼすおそれがあるので、河川、湖沼及び海域等に飛散、流入しないよう注意して使用すること。
養殖池周辺での使用はさけること。
- ❖ 水産動植物(甲殻類、藻類)に影響を及ぼすおそれがあるので、河川、養殖池等に飛散、流入しないよう注意して使用すること。
- ❖ 使用残りの薬液が生じないように調製を行い、使いきる。散布器具及び容器の洗浄水は、河川等に流さないこと。また、空袋等は水産動植物に影響を与えないよう適切に処理すること。
- ❖ 直射日光をさけ、食品と区別して、なるべく低温な場所に密封して保管すること。